改訂

# 石垣原合戦の史跡について

矢島嗣久

豊後速見郡における石垣原合戦とは、慶長五年（一六〇〇）九月十三日、天下を二分して戦われた濃州関ケ原の戦い（九月十五日）の二日前、大分県別府市石垣原（鶴見原）において、大友宗麟義鎮（よししげ）の嫡子で、西軍石田三成方となって豊後国へ再入国した旧豊後国主二十二代大友義統（よしむね）と東軍徳川家康方豊前中津城主黒田甲斐守長政の父黒田如水孝高（よしたか）および細川方城代家老の松井佐渡守康之、有吉武蔵野守立之との間で戦われ、大友義統が黒田如水、細川連合軍の軍門に降った戦いをいう。

この合戦を「豊後速見郡石垣原の戦い」と通称いわれているが、石垣原は別府市の東側海手をいい、実際に戦いがあったところは西側山手の鶴見原であった。

## 一　黒田如水本陣跡

別府市鶴見、鉄輪（かんなわ）線の「原（はる）」バス停とその東方にある実相寺線「平和祈念塔入口」バス停との中間付近、加来殿山（通称角山ルミエールの丘、標高百七十メートル）南側にある第一公園内に「史跡　石垣原　黒田如水本陣跡　昭和四十七年五月十日　市指定」と記された石碑がある。

加来殿山東側には同じく東軍徳川方で木付城（現杵築市）の細川勢が陣を敷いた実相寺山（標高約百七十メートル）がある。

細川勢とは、豊後木付城主細川越中守忠興の城代松井佐渡守康之と有吉武蔵野守立行らの軍勢約二百である。

以前には、「原」バス停付近に「黒田方井上・野村陣所跡」の木製の標柱が建てられていたが、現在は見ることができない。

井上とは井上九郎右衛門之房（ゆきふさ）、野村とは野村市右衛門のことであって、いずれも黒田方の武将である。

## 二　石垣原古戦場　時枝陣所跡

加来殿山と実相寺山との中間付近は当時「犬の馬場」といい、東軍黒田勢の陣所跡でもあった。また、大友方右翼の武将吉弘嘉兵衛統幸の軍勢がこのあたりまで攻め寄せて、黒田方の母里（もうり）や時枝勢が境川付近から引き退き、激戦

した場所でもある。このことは元禄七年（一六九四）四月、筑前福岡の儒学者貝原益軒（篤信）が豊前・豊後を周遊した際に、衣笠半助に描かせたと云う地図にも記されている。

この実相寺西麓で、ゴルフ練習場入口の右手南側付近に小さな石の祠があり、「石垣原古戦場」、「時枝陣所跡」の標注二本が建てられている。

時枝平太夫は豊前宇佐時枝城主（宇佐市時枝、市の北西部）である。

## 三　吉弘神社

実相寺山東南方七～八百メートル付近で、別府市石垣西六丁目（旧町名吉弘町）の北西部に、大友方右翼の武将、旧豊後国東郡屋山筧（かけい）城主（豊後高田市、市の東部）吉弘嘉兵衛統幸（かひょうえむねゆき）を祀った吉弘神社がある。この神社は大正十一年（一九二二）九月に神殿が建立されたものであるが、平成十三年（二〇〇一）に新しく建築された。神殿の裏手西側には吉弘統幸の石柱の墓や肥後の細川家が建立したと伝えられる石殿がある。石殿の右手前に「吉弘統幸の墓　別府市指定有形文化財　昭和四十七年五月十日指定　別府市教育委員会」の木製の標柱が建てられている。統幸は享年三十七歳という。

神社拝殿正面左手には大正十一年五月に建立された「下馬の松」の石碑や昭和五十五年（一九八〇）五月に建立された「吉弘神社の由来」の石碑がある。

「下馬の松」の石碑の表には「代から代へ　緑傳えよ　下馬の松」という碑銘が見られ、「吉弘神社の由来」には吉弘統幸の

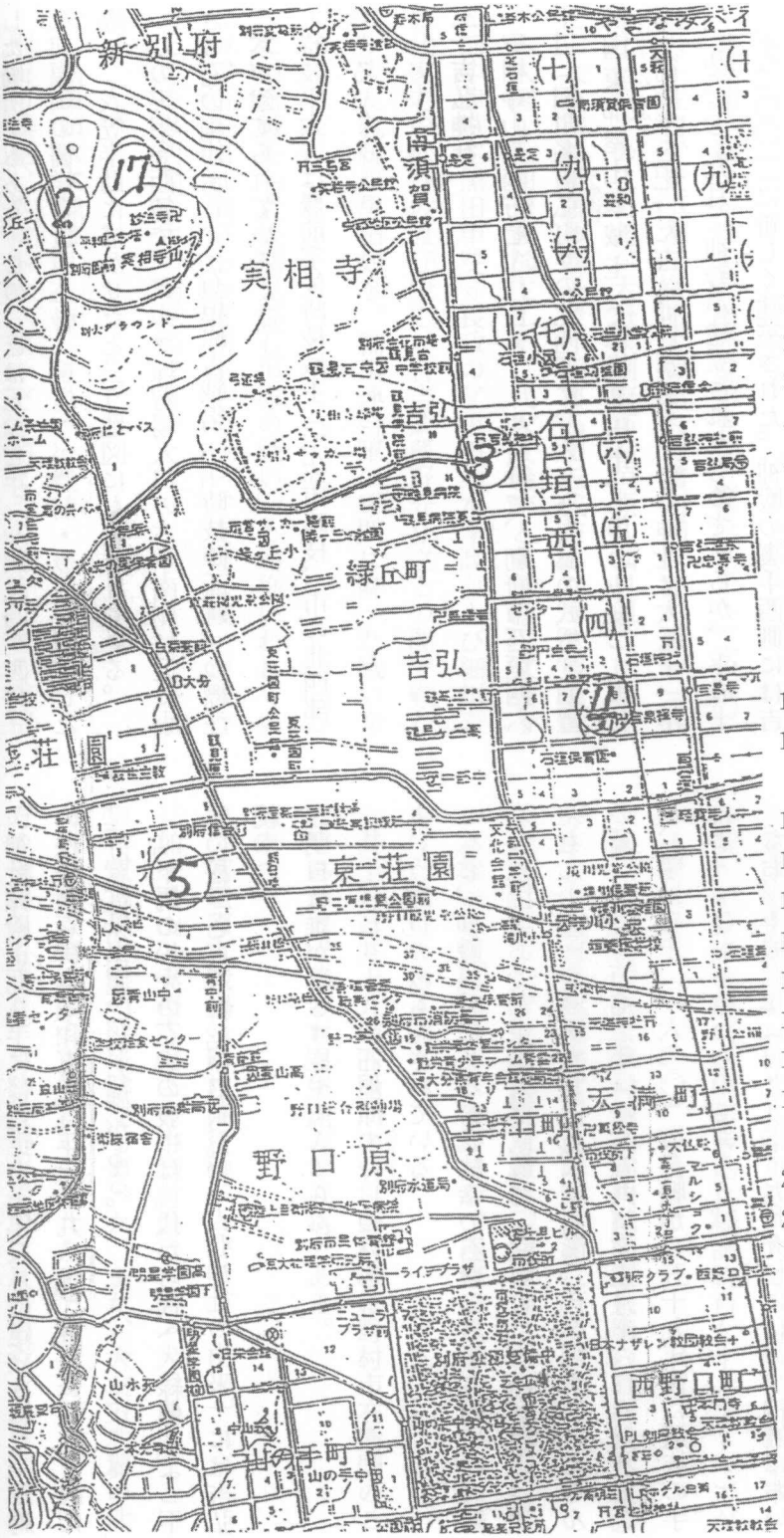
明日は誰が草むす屍や照らすらん
　　石垣原の今日の月影

という辞世の歌も記されている。

なお、神殿裏手にある吉弘統幸の石殿の右手北側には、統幸の家臣であった東国東郡武蔵郷（武蔵町）の「室理（むろり）せいさえもんの墓」を含め数基の墓石がある。「室理せいさえもんの墓」には「万治二年（一六五九）亥正月十六日」とあるから、慶長五年（一六〇〇）の合戦から五十九年後に遺族の手によって建てられたものであろう。

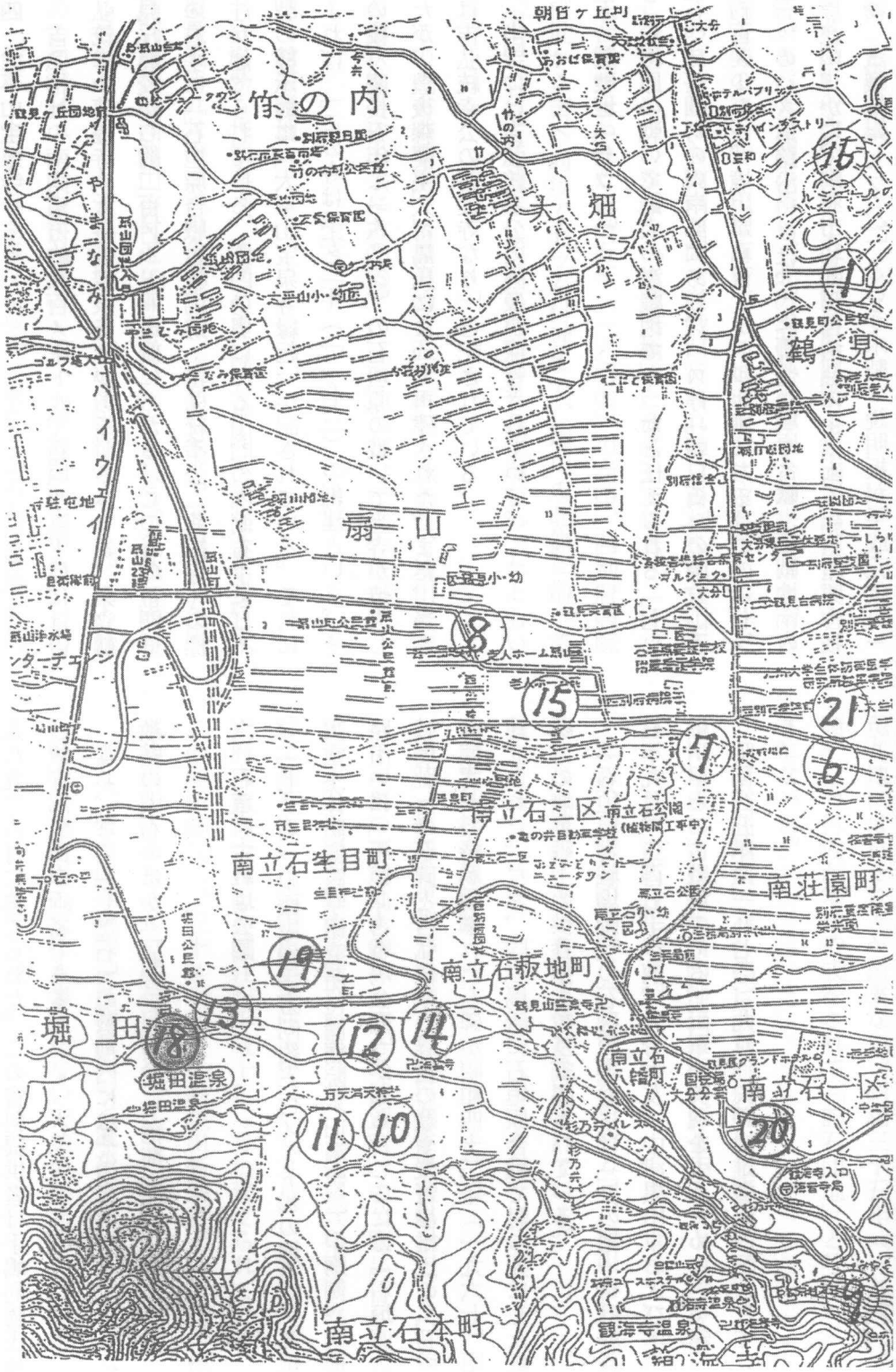
なお、平成二年（一九九〇）九月九日には、当神社において「三百九十年祭り」が行われ、東国東郡武蔵町の有志による県無形民族文化財である吉弘楽も奉納された。

平成十三年（二〇〇一）四月には吉弘神社の拝殿が約一億円かけて改築され、拝殿が一回り大きくなった。




# 別府市
# 石垣原合戦
# 古戦場地図

1　黒田如水本陣跡
2　時枝陣所跡
3　吉弘神社
4　太平寺宝泉寺
5　激戦地「七ツ石」
6　石垣原古戦場公園
7　古戦場橋
8　館石団地前
9　吉弘統幸陣所跡
10　大友義統本陣跡
11　本村天満天神宮の天井画
12　宗像掃部の墓
13　宗像掃部陣所跡
14　海雲寺
15　館　石
16　角殿山
17　実相寺山
18　大友方井上家
19　大友方井上家の墓
20　手洗荒神
21　忠内ヶ堀


竹の内
大畑
鶴見
羽山
南立石二区
南立石生目町
南荘園町
南立石叛地町
堀田
堀田温泉
南立石八幡町
南立石一区
南立石本町
観海寺温泉
16
1
8
15
21
7
6
19
13
12
14
11
10
20
9

## 四　太平山宝泉寺

吉弘神社の南南東方約八百メートル、石垣西三丁目には吉弘統幸の菩提寺「太平山宝泉寺」がある。ちょうど、県立鶴見丘高校から約二百メートル東側にあたる。この寺の正門その右手に「石垣原合戦古戦場跡　吉弘統幸公　菩提寺」の標注が建てられている。正門の奥にある山門の内側右手には木製の標示板に「太平山宝泉寺縁起」が記されている。それによれば、「この寺は承安三年（一一七三）の創建という。その後、慶長五年（一六〇〇）の石垣原の戦いで当寺が焼失したが、豊後森藩主久留島氏によって再建された。また、当寺は吉弘統幸公の菩提寺なり」と記されている。

当寺には吉弘統幸公の画像が保管されている。

## 五　激戦地「七ツ石」

石垣原の戦いで最大の激戦地であったと伝えられる「七ツ石」は荘園町の東南部にあり、バス停「朝日橋」の西方山手約百メートル、境川から百メートル北側にある。この「七ツ石」のバス道路沿いには、「史跡、石垣原合戦　激戦地」の標注のほかに、別府市荘園町自治会の手による「石垣原古戦場　激戦地『七ツ石』」という木製の説明板が平成元年（一九八九）六月に建てられた。この資料提供者は手嶋利勝氏及び故安部巌氏の両名である。

なお、この「七ツ石」の敷地内にはその名称が示すように数基の大石のほか、「七ツ石温泉」や稲荷大明神がある。

## 六　石垣原古戦場公園

「七つ石」の西方山手方向約三百メートルの地点、「九州大学生体防御医学研究所付属病院（旧温研）」の南側バス道路沿いに「石垣原古戦場公園」がある。ここには「石垣原古戦場趾」の石碑と吉弘統幸の辞世の歌や矢野嶺雄氏の「石垣原懐古」の詩が刻まれた石碑が昭和四十二年（一九六七）頃建立された。なお、同じ場所に石垣原合戦で討ち死にした敵味方の無名戦士の供養墓も数基安置されている。

「石垣原古戦場趾」の石碑の裏面には「この地一帯は慶長五年九月、三百七十年前、大分大友、中津黒田軍および木付細川軍との古戦場である。両軍の英魂を弔うために之を建つ　昭和四五年（一九七〇）九月　矢野嶺雄書」と記されている。

## 七　古戦場橋

荘園町の西側山手にある西別府病院の東南側、境川に架かっているバス道路の橋は、北方黒田勢の陣する加来殿山と南方大友勢の立石砦（現観海寺）とのほぼ中間に位置しており、このあたりでも両軍の間で激戦が行われた。これを記念してこの境川にかかる橋を「古戦場橋」と命名している。

合戦の行われた慶長五年（一六〇〇）の当時、西別府病院付近から東へ向けて七ツ石付近まで、境川の北側に沿って「忠内（ちゅうない）が掘」と呼ばれた空堀があったともいう。

この「古戦場橋」は標高約百五十メートルあり、境川による扇状地帯の山手にあたる。

## 八　館石団地

立石砦（現観海寺、南立石）に陣を構えていた大友義統は、慶長五年九月十三日の合戦当日、立石砦を下って境川の左岸、西別府病院西側山手付近に陣を敷いたとも云う。義統は当時この付近にあった石に腰掛けて戦いの指揮をとった。そのためこの石は「大友腰掛け石」とか、「屋形石」といわれ、のち「館石」といわれるようになる。現在、この石は移設され、現在地には見ることが出来ない。昭和三十五年（一九六〇）頃、この付近が宅地造成をされて「館石団地」と呼ばれるようになった。

「館石団地前」バス停は西別府病院から西方約三百メートルの地点にあり、この団地は標高約百七十五メートルから二百メートルの高台にある。

なお、「館石団地前」バス停から東南方向、境川寄りの道路には「館石」というバス停も設けられている。

## 九　吉弘統幸陣所跡

当時、観海寺東側杉ノ井ホテル付近を坂本村といっていた。ホテル群の東端にある「みゆき坂展望台」の公園には、この付近が石垣原合戦の大友方右翼の将、吉弘嘉兵衛統幸の陣所跡であるという説明板が平成十年（一九九八）二月に、また別府市教育委員会の標柱が平成十年三月に建てられている。この陣所跡は二、三十メートルの朝見川断層崖上にあり、標高約百四十メートルの高台にある。

また、砦の後方南側には朝見川の上流が崖下に流れていて、合戦のさい飲用の水にも事欠かない天然の要害堅固な城塞であった。

この公園の奥には「皇太子殿下（大正天皇）行啓紀念碑」が建てられている。その裏には「明治四十年（一九〇七年）十一月七日行啓」と記され、手前にある石板の説明によれば「大正元年（一九一二）十一月七日（建立）」と記されている。そのためこの場所を「みゆき坂」という。

## 十　大友義統本陣跡

みゆき坂展望台から杉ノ井ホテル前道路を約一・二キロ山手北西方向に進むと「天満天神宮参道」と「大友本陣之跡　別府市文化財」という木柱の案内が目に付く。それを左折してまもなく右手に「本家古家（こや）」という案内板が見え、その奥に大きな家紋のついた古屋家がある。

その付近道路沿いには「石垣原古戦場　大友義統本陣跡（古屋園）別府市役所」や「大友義統本陣跡　解説、別府市教育委員会　別府市文化財調査委員会」などの石造りの記念碑がある。この「大友義統本陣跡　解説」の石碑は昭和六十三年（一九八八）三月に建立された。また、その裏手には「石垣原合戦　戦死者供養塔」と刻まれた五輪塔も古屋家の後裔古屋勝馬氏（故人）の手によって安置されている。

また、この「大友本陣跡」は「べっぷ鶴見岳一気登山道」の道路にもなっていて、一般市民に紹介されている。

## 十一　本村天満天神宮の天井画

「大友義統本陣跡」の西側にはすぐ近くに天満天神宮がある。この神社の右手奥には「べっぷ鶴見岳一気登山道　海抜二百三十メートル」の表示を見ることができる。

天満天神宮拝殿の天井には、色鮮やかな「石垣原合戦の図」の天井画が三十三枚にわたって備え付けられている。この原画はかつて日出台演習場（玖珠郡玖珠町）の看守をしていた横田穣（みのる）少佐が描いたものを、石垣原演習場の看守をしていた村田恰（あたか）少佐の解説付きで、別府市扇山在住の沼田岩夫氏が譲り受け保存していた。この天井画は大友義統本陣跡の古屋勝馬氏（故人）の発案で、昭和六十三年（一九八八）四月に県立緑ケ丘高校教諭陶山昌男氏が指導して、この原画をもとに、県立芸短大の学生、大江朱美、橋本昌子の二氏が拡大模写したものである。

天満天神宮は故古屋勝馬氏が当時管理されていて、この天井画は大友本陣の慰霊祭及び天満天神宮の行事のさいに一般公開されている。

## 十二　宗像掃部（むなかたかもん）の墓

「大友義統本陣跡」の北西方向で、すぐ近くに昭和四十七年（一九七二）七月に建立された「宗像之碑」の表示のある鳥居があり、その奥、北側には、右手に「史跡　宗像掃部墓　別府市指定有形文化財　昭和四十七年五月二十日　別府市教育委員会」の木製の標柱が建てられていて、大友方左翼の大将宗像掃部鎮続（しげつぐ）の墓といわれる五輪塔が安置されている。なお、五輪塔のそばには小さな石殿が五つある。宗像掃部鎮続もこの石垣原の戦いで大友軍の左翼の大将として戦ったが、討ち死にしたという。この墓の北側、崖下付近には県道別府一の宮線の「本町」バス停がある。

## 十三　宗像掃部陣所跡

南立石本村の天満天神宮の北側道路杉の井ホテル前道路を西側へ登って行くと、大分自動車道と立体交差する跨線橋に出る。それを越えるとその北西側は断崖の上部となっていて、眼下北側には石垣原（鶴見原）が開け、北東方には加来殿山や実相寺山を望むことが出来る。

当時、この断崖上には合戦用の鐘を掛けた「鐘掛けの松」があったといわれる場所がある。現在、その地点には「史跡　宗像掃部　陣所址　昭和四十七年五月十日　指定　別府市教育委員会」という標柱と石碑「覧古碑」が建てられている。この「覧古碑」は、故堀　藤吉郎氏著の「別府温泉歴史略年表」等によれば、大正六年（一九一七）十月、北白川宮成久王がこの高台に来られて、石垣原の古戦場を展望され当時の戦況を土地の人々から聞かれたという。これを記念して、この場所に「覧古碑」といわれる石碑が建てられた。その後、昭和十四年（一九三九）十一月には、その王子北白川宮永久王も来られて父宮の記念碑を視察されたという。最近、大分自動車道との立体交差のため、この付近の地形の変貌が著しい。

この宗像掃部の陣所址は標高約二百六十五メートルの高台上にあり、この土地の北方崖下には県道別府一の宮線の「堀田」バス停がある。

## 十四　旗の台、加藤清正像

県道別府一の宮線（九州横断道路と重なる）の「別府ロープウェイ」バス停と「鳥居」バス停との中間地点で、県道左手南側の高台上（標高約五百三十メートル）に肥後熊本城主加藤清正の小さな石像が見える。この石像は昭和二十七年

（一九五二）頃に建立されたものという。

これは、石垣原の合戦に東軍徳川家康方の黒田如水孝高を助けて、加藤清正軍の先手がこの付近までやってきて軍旗を立てた場所。しかし戦いはすでに終わり、大友義統は黒田如水に降伏してしまっていた。

「大分県史　中世篇Ⅲ」によれば、十四日に内牧（熊本県阿蘇郡阿蘇町）で宿陣した清正は、翌日肥後小国（熊本県阿蘇郡小国町）から引き返したという。

## 十五　手足荒神（てあしこうじん）

観海寺、杉の井ホテル北側の駐車場からバス道路を隔てて、建築板金店の右手から左へ迂回し、六、七十メートル進むと、道路の左手の民家の屋敷内に「手足荒神が祀られている。拝殿内左手奥には「手足荒神の由来」の額が掲げられている。これによると、「手足荒神の由来　石垣原合戦・慶長五年十月十三日（西暦一六〇〇年、旧暦では九月十三日）大友義統（豊臣方）の陣営は、立石付近に、黒田如水（徳川方）の陣営は、実相寺付近に拠点を置き、その中間地帯の石垣原で、遭遇戦の形で、本合戦が展開されたと伝説されている。　合戦の前日の夜半、黒田方の偵察侍の一人が大友方の不寝番の侍に捕えられ尋問すると、偵察した後、崖からおりるとき足を踏みはずし転落、手足を骨折したとの一言、それ以外の尋問には答えず、ただただ無念の歯がみをするばかり、しばらくして『拙者は黒田方にさる者ありと知れた者じゃ。手を挫かずば、お前共の手に掛かる者ではない。切って手柄にせよ。死して百世の後まで、魂はこの世にとどまり、手足を挫いた者を救うであろう』と、言い残してざん首された。大友の武将、吉弘統幸はこれをあわれみ、川原端に手厚く埋葬したとの伝説がある。また、この合戦で負傷した武士たちがこの地で傷を治癒した伝説があり、以後手足を挫いた者が参詣すると不思議にも治癒することから、お礼に佐藤家の先祖がこの地に『ほこら』を建て、『手足荒神』として崇拝されるようになった。　平成二年十月吉日　奉納　秋吉トヨ」と記されている。

## 十六　海雲寺

本陣跡の北東方七、八十メートルの道路北側に「海雲寺」がある。大友義統は合戦後、この寺において剃髪して黒田如水孝高に降伏したという。

南立石本町、曹洞宗。本尊は釈迦牟尼座像。縁起によると、

応安三年（一三六八）玉田和尚が開山（かいさん）した。のち大友親著（ちかつぐ、十一代）が山林田畑を寄進し栄えたが、慶長の大地震（慶長元年〔一五九六〕閏七月十二日）で倒壊した。元和年間（一六一五～一六二三）饒州（じょうしゅう）和尚が中興したといわれる。境内には、十八世紀の初めから十九世紀にかけての一字一石塔や供養塔が多く、西国三十三番の札所となっている。本堂南側のカヤの大木は、市指定の保護樹となっている。山門から見おろす別府湾は、絶景で詩情をそそる。

## 十七　実相寺山

別府市のほぼ中央に標高約百七十メートルの小高い山が東西に二つ並んでいる。

東側の山を実相寺山という。徳川方の細川勢約二百が実相寺山の南側松山という丘の上に陣を敷いた。現在この場所は明豊高校のグラウンドとなっている。現在、実相寺山の山頂には白い仏舎利塔がそびえ立っている。西側の麓には「時枝陣所跡」の小さな祠があり、数年前には木製の階段が設けられている。合戦終了後、黒田如水孝高が実相寺山頂で大友方の首実検を行なったという。合戦終了後、細川家は豊前小倉に移封され、その後肥後熊本を領した。筆頭家老であった松井康之の子孫が肥後八代城主となり、現在八代神社に祀られている。

## 十八　角殿山

実相寺山の西側、標高約百七十メートルの小高い山で黒田軍の陣所がしかれた所である。黒田方の武将井上九郎衛門之房が山頂に登り戦況を見計らって「頃はよし、総攻撃にかかれ」と下知をしたという。ここの西側には以前「井上、野村陣所跡」という表示板が設置されていたが現在は開発のため見ることができない、井上とは井上九郎衛門之房、野村とは野村市衛門のことを言う。現在この小山は高級分譲住宅地となって開発されており、名前も「ルミエールの丘」と付けられている。このルミエールの丘の住宅分譲地の南側の麓、道路沿いには第一公園があり、公園内西側には「黒田如水本陣跡」の石碑が建てられている。

角殿山の地名のいわれは、大友時代の軍師であったといわれる大神系賀来氏がこの付近を支配していたので角（賀来）殿山といわれていたとも伝えられている。ちなみに、この付近には「馬場」とか「犬の馬場」という地名が残っている。

## 十九　犬の馬場

東側の実相寺山と西側の角殿山（現ルミエールの丘）の中間には南北に通じる道路があり、道路の西側には店舗塔が立ち並んでいる。合戦当時、実相寺山と角殿山との間の道路付近は「犬の馬場」と言われていた。犬の馬場とは犬追物といい、円形の囲いの中に犬を放ち馬に乗った武士が弓矢で追いかけ武術の鍛錬に用いた場所であったと思われる。

## 二十　馬場

角殿山の北側は現在も馬場といい、昔は文字通り馬の調練をしていた「馬場」があったものと思われる。合戦当時、黒田方の武将達は角殿山の北側、馬場の庄屋等に宿陣した。現在の平松源六氏宅にも宿陣したといわれている。

## 二十一　実相寺

実相寺山の東側の麓には慶長五年の合戦当時には実相寺という寺院があった。

合戦の終了時にはこの寺院が東軍、黒田、細川方の救護所及び死体安置所となり、血でけがされたため、合戦終了後この寺院を焼き払って、北西側約一・二キロメートル離れた現在地火売（ほのめ）町に移転されている。この寺はその後、玖珠の久留島領となり、藩主の庇護を受け、栄えたと伝えられている。

## 二十二　観音寺

観音寺は別府市内の亀川四の湯町二区にあり、禅宗の黄蘗（おうばく）宗である。

養老四年の開基で、永享八年に大友持直が再建した。慶長五年の石垣原の戦いによる兵火で焼失した。のち江戸時代の寛文二年（一六六二）に再建されたという。

## 二十三　長泉寺

寺院の創建は寛徳二年（一〇四五）と伝えられている。後朱雀天皇のとき皇太子親仁親王が重病にかかり、柴石温泉に入湯、平癒した。その後、親仁親王は後冷泉天皇となった。この場所に寺院を建立、朱湯山寛徳院長泉寺と名付けたと伝えられている。

「寺院明細帳」には、「慶長年間（慶長五年、一六〇〇）兵火にかかり、堂宇つくす」と記されている。また「朱湯山寛徳院長泉寺略縁起」には「慶長年間兵火ニ罹」焼失したが、

「尊像ノミハ免カレ」たとあり、石垣原合戦で焼失したことを伝えている。なお尊像薬師は同寺に現存している。

## 二十四　忠内ヶ堀跡

大友方右翼の武将、吉弘嘉兵衛統幸と黒田方武将、井上九郎衛門之房とが「忠内ヶ堀」という空堀で戦ったという。この戦いで吉弘統幸が井上之房に破れて、戦いの大勢は黒田方の勝利となったという。

元禄七年（一六九四）四月、貝原益軒が豊前・豊後を周遊した際、従者の衣笠半助に描画させたという「石垣原合戦図」がある。これによると「忠内ヶ堀はカラホリ（空堀）、ヨコ三間（五・四メートル）、長さ百間（百八十メートル）余、井上九郎衛門、吉弘加兵衛の戦いの所」と記されている。

古戦場公園標石塔

その場所は不明であるが、別府市荘園、現在の九州大学病院（旧温研）構内の北西側にそれとおぼしき原野が保存されている。初代の病院長が合戦当時の原野の現状維持に努めたと伝えられている。ただし、見学する場合は病院の許可が必要である。

貝原益軒は福岡藩黒田家の儒学者である。

なおこの稿は、一九九一年（平成三年）十二月　矢島嗣久著「別府史談」　一九九一　第五号に掲載後改訂を重ね二〇〇六年（平成十八年）五月十一日に脱稿したものである。